
ハッピー・サマー・ウェディング（後編）

茶山ぴよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハッピー・サマー・ウェディング（後編）

【ZPDF】

Z5003C

【作者名】

茶山ひよ

【あらすじ】

中学時代の同級生が8人も亡くなっていた。それはすべてまさみイジメに関わっていた女生徒だった。これは呪いなのか、それとも……？ 夏ホラー2007参加作品です

(前書き)

夏ホラー2007参加作品です。

「あーーー。田舎さんー！」

野上が、ふいに高い声をあげたので、朦朧としていた私はびくんと覚醒して振り返る。

ワンピースを着た背の高い女の人人が手を振っていた。

「懐かしいー。田那さんは元気ですか」

うるさい野上が仕事を手を止めて近寄るところを見ると、会社のGらしこ。

私が入社する前に退職した人かな。

私は出で立くなつたあぐびを手で無理やり体の中に戻すと、画面に戻つた。

それでも悶気はさざ波のように襲つてくる。

このところずっと、悪夢に纏まっている私は、ぐっすりと眠れないと、い。

おかげで毎は朦朧としている。特に今日のような雨の日は調子が悪い。

ちなみに徹さんは、出張中で今日は会社にいない。

「……そりそり、大久保くんは、元気になつたの？」

ふいに聞こえた徹さんの名前に、私の眠氣は一気に引いた。

パソコンの手元を動かしながらも、田の端が野上と山室という女性が話しているほうに向いてしまつ……と、野上と田があつてしまつた。

野上はなぜか、ニヤツと口角をあげると、

「そりそり。すっかり元気になつたんですね。この子、この子

とすり寄つてきた。肩をガシッと掴まれて立たされると、おもむろに山室さんのほうに突き出された。

「この子ともうすぐ結婚するんですよ」

「へえー。じゃあすっかり立ち直つたんだ、大久保くん」

私は、徹さんが何から立ち直つたのかわからなくてあいまいに笑つた。

……そんな私の様子を野上はニヤニヤしてみてくる。

山室という先輩は、特に意地悪というわけでなく、心から徹さんが立ち直つたことを喜んでいるらしい。

私は、山室さんに思い切つて

「あの、大久保さんが立ち直つたって……」

と問い合わせてみた。

「あ、知らなかつたの? 言ひちゃいけなかつたかな」

と山室さんは目を丸くした。

一日散に帰宅した私は、パソコンを立ち上げるのもどかしく、検索ワードを入力した。

『××川、バラバラ、殺人』

中途半端に聞いたら気になっちゃうよね、と山室さんが社食に私を連れ出して教えてくれたこと。

嘘だ。嘘に決まってる。

ありもしないことを言ひて、私がおびえるのを見て楽しんでいるのだろう。

検索結果が表示された時、私は目が張り付いたように、またたきをすることすら忘れた。

本当だつたんだ……。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

2005年9月20日、県市の××川の中流で、バラバラに切断された女性の遺体が見つかった。

殺されたのは、会社員の水川里奈さん（当時22歳）で死後1か月が経過していた。

犯人はいまだに見つからず、捜査中。

7月下旬に××駅で友人を待つ水川さんが目撃されたのが最後で、携帯や衣類などの所持品もいまだ見つからない。

遺体は腐敗がひどく、死因は特定できていないが、生前に長期間にわたってひどい暴行を受けていた痕跡があつたため、7月下旬に拉致されたあと、少なくとも1週間以上は生きて暴行を受け続けたとみてている。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

雨音をバックに山室さんの言葉が蘇る。

「……2年前にバラバラ殺人事件があつたでしょ……あの殺された女性が、大久保くんの彼女だったの」

「遺体はもう指紋もとれないほど腐つてて、唯一身につけていたものが大久保君からもらつた指輪で……それで身元がわかつたの」

私は腐乱した遺体の臭気がただよつてゐるよつた気がして無意識に口を押される。

「……そのときの大久保くんは、見ていられなかつたわ。彼女が殺されたのは自分が待ち合わせに遅れたからだつて、自分をすく責めて……」

「早く、早く彼と離レロ。きっと死んでしまウ

脳裏に先日からのメールが、きれかけた蛍光灯のようにチカチカと瞬いでいる。

萌ちゃん。どうして助けてくれないの。ねえ、萌ちゃん。

まさみちゃんの声がある。

ああ、またあの夢だ。私は夢の中にいることを自覚しながらも自分を覺醒させることができない。

まさみちゃんを無視するしかない。無視しながら心は叫んでいる。

仕方がないの。

まさみちゃんと話すと、私も無視されちゃう。……私、こわいの。

『 もやもやめ、キモーイー萌、そんなのに行き合わなこでいいつむ
いどよ』

割り込む宇佐見ナナの声。

クラスで一番かわいくて、権力があつたナナ。

彼女に逆らうことのもちろん、彼女の誘いを断ることなど、同じクラスの誰にもできるはずはなかつた。

まさみちゃんはキモくなんかない。まさみちゃんは私より美人だつた。みんなわかつてる。だけど言えない。

ねえ、萌ちゃん。いかないで。

腕にすがりついてきたまさみちゃんの皮膚は腐り始めていた。私は怖くて、おもわずその手を払いのけた。

だが、腐つた皮膚は、腕にぬちゅうとほりついたまま取れない。

まさみちゃんは、骨を露出させながら、なおも追つてくる。

私は化け物と化したまさみちゃんを蹴つた。

腐つたまさみちゃんの体は……床に投げ出された衝撃でバラバラになつた。

バラバラになりながらも、もえちゃん、もえちゃん、と涙を流していた……。

徹さん？

走り去つた車の中に、その姿を見た気がした。

でも、ここに徹さんが現れる理由なんてあるはずもない。

私は、気を取り直すと、田の前の小さな寺の門をくぐつた。

立ち並ぶ墓石にひときわ蝉の声が反響するようだ。

梅雨が明けて、日差しは遠慮なく萌に降り注ぎ、私は立ちくらみなどしないよう気合を入れた。

あつた。

坪井家之墓。

8年前に見た時より、少し古びている。

誰かが来たばかりなのか、供えられた白いコリの花束は日差しの下でまだ萎れていなかつた。

私はまず墓石に水をかけると、持つてきた白菊の花束はバケツの中に入れて、まずは手をあわせる。

おれみちやん、あのとれせーじめんね。

毎晩のよつて見る悪夢に悩んだあげく、私はつここおれみちやんの墓前で謝る」としたのだ。

お墓の中にはいるのか、天国にいるのか、わからないけれど……私はまことにやんの魂があるのなり、許してせしこと懸命に祈った。

呪いなんかはありえない、と私は思つ。

本当のまれみちやんは、一度でも悪夢の中のよつてがりつてきたことなんかなかつた。

ひとたび、私の立場を語ると、あとは黙言だつた。

泣きもせず、呟みじとも言わず。黙つて耐えていた。

しゃがんだまま、墓石を見上げた私は、あるものに気づいた。

二つの花が活けられた花立てにおみくじのよつた薄い紙が結びつけたある。

書いてある文字が透けて見えて……次の瞬間、私は、無我夢中でそれをほざひざと躍起になつた。

それは何かのリストのよつて見えた。

「××高1年B組」

「中2年4組」

ところ見出しの下に、女性の名前が並んでいる。

名前の上に、血のよくな色のマジックで大きく赤い×が記してある
……。

指先が一瞬でもみに震えてなかなか読み進めない中……私はそこに連
なる名前にある共通点を見つけて……へたりこんでしまった。

「あのメールを出したのは私よ」

室内なのに濃いサングラス、マスクに帽子といつ姿の宇佐見ナナは、
背を向けたまま確かに言った。

1年前に誰かに薬品をかけられて以来、ほとんど部屋から出ないと
いう宇佐見ナナだったが、訪ねた私を自室に招き入れてくれた。
ミニチュアダックスが、さも珍しそうに尻尾を振りながら私の足元
にまつわりつく。

この犬だけが、今のナナの唯一の友人なのだろう。

顔を見たらショック受けるから、とナナは今お母さんが持ってきた

アイスコーヒーを持つて立ち上がると、机に向かう……つまり私は背を向けて話し始めたのだった。

「2年前に殺された水川さんは、高校時代の私の友人だったの」
そういうながら、ナナはに背を向けたままマスクを外す。ストローでアイスコーヒーを飲むためらしく。

一口すすると、ケロイドに覆われた手で、サングラスもはずした。
こんな室内では必要ないからだろう。

私は墓に供えられたあのリストを思い出す。

『××高1年B組』の下に、たしかに水川里奈の名前があった。赤い×付で。

まさみちゃんは、運の悪いことに……志望校に落ちて、イジメ首謀者である宇佐見ナナと同じ高校に進むことになってしまったのだ。

それが××高校だ。

「あたしは、水川さんたちとつるんで、坪井さんをイジメたの。ヤンキーばかりの女子高だったからそれはひどかったわ。あたしたちのせいで、坪井さんは自殺しちゃったんだと思つ」

まさみちゃんの命日は、御盆明けの8月18日だった。

夏休みの補習が始まる前日、まさみちゃんはマンションの屋上から飛び降りて命を絶つたのだった。

私はかける言葉もなくて、せめてアイスコーヒーを飲もうとした。

シロップとミルクを入れたのに、アイスコーヒーは苦しままで。喉にひつかかるようだつた。

でも、何で。

ナナはなぜ、匿名であんなメールを送りつづけてきたのか。

それを問い合わせようとしたとき、ナナはさらに話を続けた。

「坪井さんが死んだと知つて、あたしたちは、面白半分でお通夜に出席したの。もちろんイジメなんかなかつたといつような顔でね。そのときに」

お通夜の席に飛び込んできた、若い男がいた。

「『まさみー』って大きな声で叫びながら飛び込んできたわ。どうか外国から急きよ帰国したんでしょうね、大きな荷物を抱えたままだつた。

人がいっぱいいるのに、お棺にすがりついておいおい泣いてね」

そのとき、一緒に通夜に出席していた、ミカつていう友人 その子も、3年前に亡くなつてゐるんだけど がナナと里奈に囁いた。

『ね、あれ、徹さんじやん』

「私は知らなかつたんだけど、ミカの話によれば、徹さんっていうのはね。悪いことをやつてゐる口の中ではリーダーな存在だつたんだ

つて。

いいところのボンボンだし、イケメンで優しそうなんだけど、ひとたび怒らせると「ワイって」

気に入らない子を半殺しにしたり。飽きた女の子を山に埋めたつて噂もあつた。しかもすべて自分で手を下さずに片づけたといつ。

「……あたしたちは、その伝説の徹さんが、坪井さんの別れたお兄さんだつてことを知つて、もうガクブルで。

そんなに可愛がつていた妹がイジメられていたことを知つたら、殺されかねないと思つたんだけど。でもしばらくは、何もなくてね。私たちはそんなことをすっかり忘れて無事高校を卒業できたの」

だけど……3年前にミカが交通事故で亡くなり、2年前に里奈が殺されて。里奈の葬式に出席したナナは、徹さんの姿を見て、声をあげそうになつた。

「徹さんは里奈の死を、とも悲しんでいそうに見せながら、じつちを一瞬見たの。それは恐ろしい田で……あたしは凍りついた。それで、次はあたしだ。そう思つたの」

その予感はあたつて、ナナは1年前、暗がりで硫酸をぶっかけられて、一度と人前に出られない姿にされてしまった。

「これはきっと復讐よ。徹さんが……坪井さんをいじめた相手を一人ずつ消してゐるの」

それは、またみちやんのお墓で見たあのリストとぴったり合致していた。

そして……あのリストで、唯一赤で×がついていない名前……それは私だつた。

「次は、萌ちゃんだから」

ナナが後ろ向きのままさう言い放つた時、犬が私の飲みかけのグラスに悪さをして……「一ヒー」が倒れてしまつた。

その騒がしい音に、思わずナナは振り返つた。

「うぐひ」

私は、思わずその形相にのけぞつた。

ナナの顔の……2／3は、赤く……テカテカとひきつったようになつた皮膚に覆われていた。

ぱつぱつとして可愛かつた田は、瞼が焼けただれたのか、押しつぶされたように……そう、あの怪談のおばやんのようになつてゐる。まつげも眉毛もない。

形の良かつた唇も溶けて、いびつな形の肉片が垂れさがつてゐる……。

「「」みんなさー」

「とにかく、結婚はやめたほうがいいわ」

「ナナはすぐ元へ後ろを向いたが、付けくわえた。

「萌。いきなり結婚をやめよつゝじびつことなんだ」

徹さんの整った眉が歪んでいる。

ナナの話を聞かされても私は、まだ半信半疑だった。

偶然だとしたら重なりすぎているけれど。

『次は、萌ちゃんだから』

その声と、化け物のよつになつたナナの顔が、萌を苦しめたけど。

だけど……それが徹さんの仕業とは考えたくない。

復讐なんかじゃないにしても、徹さんの可愛がつていた妹のまやみちゃんが、イジメられるきっかけをつくつたのは私だ。

そんな私が、徹さんのお嫁さんになれるはずがない。

「あの……徹さん」

私は、思い切つて打ち明ける。

「徹さんの妹の……坪井まさみちゃんは、小学校5年から中2まで一緒にクラスだったの」

徹さんはなぜそんな話題をするのか、とこいつよつこ一瞬田を大きく見開いた。

だけど、すぐに優しく田に戻る。

「うん。知ってるよ。……まさみが、仲がいいって手紙に書いてた」

徹さんは私を優しい瞳で見つめた。

「だから、萌が入社してきたとき『まさみの友達だった子だ』って興味を持つたんだよ」

そんな温かい声に、私は思わず田を下ろそりした。

「でもね……中2のとき、まさみちゃんはイジメにあって

言ふことなくいけど言わなくちゃいけない。

「最初はあたしがイジメられてたの。まさみちゃんは私を助けようとして……それで今度はまさみちゃんがイジメにあって……でもあたしは何もできなかつた」

うん、うん、と答える徹の声は徐々に小さくなつていぐ。

「だから……まさみちゃんが死んだのは、あたしのせいなのかも」

「あめんね。まあみちゃん。

吐き出した心の中の罪悪感と一緒に涙があふれてしまつ。つらいのは私ではない。まあみちゃんのせいなの。」

「萌」

「あたしに、勇気があれば」

勇気があれば、まあみちゃんはあんなことにならなかつた。徹さんの可愛がつた妹のまあみちゃんは……。

「徹さん、ゴメンなさい。……まあみちゃんは、まあみちゃんは」

「やうやうつな

ぽん、と頭の上に温かい感触。徹さんが私の頭に手を乗せたのだ。そのまま頭の形をなぞるようにして、肩を抱く。

私は徹さんの体温に包まれて……よけいに涙が出てきた。

「まあみが死んだのは、萌のせいなんかじゃないよ」

徹さんは、ゆっくりと、でもほつときと声こぼした。

「イジメを止めるなんて……出来なくてあたりまえだ」

徹さんは私の耳元でつぶやいた。私の肩に置かれた指が優しく、トンと動いてくる。

「……無理にやめさせようとして自分がターゲットになつても……誰も助けやしないんだから。……そりや」

ふいに柔らかく抱きしめられる。

「まさみのことは、すぐ悲しかつた。俺たち、離れ離れになつても仲が良かつたし」

徹さんの声が震えている。……私は徹さんが泣いてることがわかつた。

「まさみは……イジメられてたなんて、ひとことも言わなかつた。今思えば、俺に心配をかけるまいと我慢してたんだろうな。……言ってくれれば……力になれたかもしれないのに」

私はナナよりも田の前の徹さんを信じた。

あれは、復讐なんかじやない。単なる偶然だ。あの紙切れも誰かがイタズラしたものに違いない。

あんなにやさしい徹さんがそんなことをするはずがない。

8月1・2日、私と徹さんは晴れて結婚式をあげた。

披露宴もつつがなく終了し、翌日私たちは婚姻届を役所に提出した足でハネムーンに旅立つことになつた。

ハネムーンはカリブ海の小さな島で一週間ゆっくり過ごし、決めていく。

「あれ？」

タクシーの中で、徹さんはすうとんきょくつな声を出した。

「あ、オヤジめ。印鑑を忘れてやがる」

「え？」

見ると、婚姻届の証人の署名欄にある徹さんのお父さんの名前には、見事に印鑑を押し忘れられていた。

「弱つたな。今から印鑑を押してもここに行つたら、飛行機に間に合わないよ」

徹さんは頭を抱えた。

「いいよ、もう、式も披露宴も済んでるんだし。ハネムーンから帰つてきてから届を出せば」

私は助け船を出してあげた。

「い」めんな

徹さんは、タクシーの中で私の肩を抱き寄せた。

その島は、ラムネゼリーのような透きとおった海に囲まれていた。部屋毎にプライベートビーチを持つ、リゾートホテルなんか一生来ることがないと思っていた。

「天国みたい」

思わずつぶやいた私を、徹さんはサングラスの下でふつと笑った。

「天国の次は竜宮城へ行つてみますか？姫」

とおびける。シユノーケリングをしてみようと誘つてゐるのだ。

砂浜の海底が終わり、ラムネの色が少し濃くなるあたりには、驚くほどたくさんの熱帯魚が棲んでいると、昨日ホテルのバーで写真を見せてもらつたばかりで私は嬉しくなつた。

ラムネ色の海の中は、まるできらめく魚の群れで万華鏡のようさえ見えるほどの美しさだった。

「想像以上にキレイだね。これは水中写真用デジカメを取つてこないともつたまない」

海面に顔を出した徹さんは

「ちよつと待つて」

と言ひ残すと陸へと泳いで行つた。プールに通つてゐる彼は泳ぎも

早い。

私は徹さんとカメラを待っている間、再び水面に顔をつけた。

海の中は、本当に見あきない。

と、そのとき。

海の中の魚たちの動きがあわただしくなった。

直感で沖のほうを見た私は、2つの巨大な魚影を見て、凍った。

鮫だ。まっすぐにこちらに向かってくる！

私は懸命に泳ぎ回とした。

助けて、助けて。

しかしいくら早く泳ぎ回とも、人間が水の猛獸に勝てるはずがない。

必死で泳ぐ右腿に、ガラスで切られたような激痛が走る。

同時に海の中にすくい力で引きずり込まれる。

ラムネ色だった海が、赤く濁るのが見えて私はもがいた。

「ふあっ」

右足ごと、鮫が1回離れた。右足を失った体はありえないほど軽くなり、あたしは顔をなんとか海面に出した。

「助けて！助けて徹さん！」

ちゅうひビーチにあがつた徹さんはゆっくりと振り返った。

そういう間にも、横腹に鋭い痛み。文字通りえぐられるような……直後になぜか、塩からい海水が喉のほうからあがってきて、シユノーケルに血混じりの海水が逆流する。

「ぐつ、がぼ」

言葉にならない。もうだめだ。

横腹を食いちぎられた私は、なおもビーチにいる徹さんを求めて声にならない声をあげた。

徹さんは、カメラではなく、日焼け止めのボトルを手の上で軽くバウンドさせていた。

意識が、肉片と化しつつある体を離れる直前、私は、徹さんがあの日焼け止めを、私にだけ塗つたことを思い出した。

徹さんの満足げな笑顔から……私は、復讐が遂げられたことを最期に悟った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5003c/>

ハッピー・サマー・ウェディング（後編）

2010年10月13日17時54分発行